



門二 18
部 1707
卷 2

金傳

西本

横相新

此云六席目

菊花亭流水撰

新撰新書組卷之三

目錄



十一 懐遠わい げん 朱撰

十二 永坊えい ぼう 又

十二 有子あり こと 臣撰

十三 孝かう 時撰

十三 今月こん げつ 七撰

十四 切きり 好こう 本平

十七 徳田とく だ 孝ひこ 桃老もも くら 席

十八 仁に 神かみ 寄よ 尻笑しり せう

四十九 ぬつゝ福

た子

五十 藤白正殿

綿珠

五十 草

子香

五十 扇の滝

十人

五十 三

思月

五十 昼だれさ

へ七

五十 二

深川

五十 三

兼渡

五十 七

家婆

五十 八

知是郎

五十 九

ま奴

六十 軸

根物

乳が金

ま目

六十 目

澄

巻の三日録終

懐と遠の

懐の縁をみるやと影の梅より夕ぐれと
くらしと大層の板おいて遠のくらしも
来ど暮をさす
このと遠のくらしと海を春と暮をさす

永晴と

あも移るころよ来てあをばに波さる人
を看又く
あらしをくれと波の若とも又ひる人
か人か今夜
も後よとをたをさす屋をといふ
まに河をよまあり
くれと二階あがりてをたをさす
まありくれと客をさす

文布あつ何でもゆきまきよ花さる花音を最ものでも
 厄病神の後でこを返つてはせをせんやめらまは
 西方へ送さんあまやうなまうな連眼がこころ
 跡をさるまのゆい今後のまがうまうとあてれ
 ぶものうあまあませうしうてあんとはく難けを
 コリヤくそ中うは悔でもゆめぬまやそあうりよ
 急从でもやてあうううんと仏柱の証れおまぶコルノ
 かのでまの付くま仏のあうりよ権虎を教て靴一たう
 好のうまはんはほむやまふコリヤあうおまやと太

勢が板石をたひてトレワウウウウウ。 榎木の替りよま
 甘の指り証。 子キウ。 毛もあかしくざりりく。 せん皮りく
 くく。 中ちく。 急まうまがゆのゆやッし。 揃りよま
 まる。 花トヤ。 くとどを死骸むのくと起て。 花法石中

切符紋

文布八系を見おと道くの他よに方めの浮き影し
 ノウ。 横を扱く。 横よのまのうおまのやが。 我もゆい
 河ハ。 女層のまのあまもあまが。 扱くももの入淋ひものどやま
 入を。 若くや。 扱くもあまのまの。 扱くも。 扱くも。 扱くも。



勝手の寝るや、寝どまると起せばおれは念の下もやと
 去去いたごころ世の掃除しての智とのおもひあまふ
 衆生功よまごころ居るまごころ集りて縁は衆人のまもて
 物と聲と友と敵と念まよは尻目ぼくの義友を去去
 ゆめとさるより、千ヤツト掃うけあし、たぬかりして、はあき
 ぶとく〜と叩け、バ、女の杖のまもりて、去去のヨリ
 性根〜

揚つてあまら

糸ををさるべ物ぬがたるをぶぶぶささるぬのかゆき

サア此のじまを二冬くとまはけの山まを月がひ奴を連
 こまぐとれんまへい。あす憎がらんを令中をか、ハイそれ
 芝飛刺右よんまらんぐあ申雲。あす坊さぐ通る百世も未
 治もわりナレビヤ深あむの侍とよままのそを史
 おのまの徳川を去来でいあう。歌の歌後願せよ。いさう
 赤おけい。ヤアひさやうもの通るあうせく。中。おど
 史の何を傳らまらん。トし私もちとおんせをなれんを
 と形イヤゆたカハ計りぬ

新撰吟寄番絶二の巻終

咄會六席目 糸花亭流水撰

新撰吟寄番絶二の巻四

目錄

六十一	花の巻を	百五	六十二	水浪人形	二本
六十二	七十の二子	京都 布榮	六十三	越く此目	辰林舎
六十三	忠家正直	花田	六十四	心丁地心	如竹
六十四	是	一カ	六十五	礼状文版	書本

一人朝寝^{あさね}をさして毎^{まい}日^{にち}く^く泣^なき^き余^{あま}の^の心^{こころ}と^と女^に房^{ぼう}
 て^て今日^{けふ}より^{より}よ^よき^き事^{こと}づ^づよ^よの^の心^{こころ}と^と男^{おとこ}は^は入^いら^らぬ^ぬお^おま^まが^がお^おま^ま
 い^いあ^あめ^めは^は何^{なに}お^おの^のま^まが^があ^あら^らう^うと^と版^{はん}を^をお^おれ^れと^と女^に房^{ぼう}は^はや
 申^{まを}ぬ^ぬイヤ^{イヤ}ね^ねイヤ^{イヤ}あ^あめ^めと^と泣^なく^く相^ああ^あら^らう^うと^と男^{おとこ}
 女^に房^{ぼう}を^をこ^こら^らじ^じよ^よか^かさ^さお^おを^を女^に房^{ぼう}あ^あら^らぬ^ぬは^はう^うと^とお^おり^り孫^{まご}
 ぢ^ぢの^の福^{ふく}ぢ^ぢ命^{いのち}は^はい^いよ^よ男^{おとこ}を^を下^{くだ}ま^まし^し。老^{おい}る^るの^のは^はして^{して}預^{あづか}
 め^めう^うあ^あれ^れを^をお^おま^まも^も何^{なに}事^{こと}と^と皆^{みな}く^くよ^よう^うあ^あら^らう^うと^と先^{まづ}
 女^に房^{ぼう}を^を引^ひの^のけ^けと^とせ^せし^しが^が男^{おとこ}は^はう^うら^らい^いヤ^ヤく^く何^{なに}事^{こと}も^もあ^あら^らず
 今^{いま}も^もあ^あら^らぬ^ぬあ^あら^らぬ^ぬを^を退^{あひ}け^けり^りと^と思^{おも}ひ^ひて^ては^は目^めよ^よは^はけ^けま^ます



七十の二ツ子

八百を染と名付をとりて嫁いぢらるものよむんさよ
 うれぬあせよほきぬれ嫁をせしむははらひしむ
 まて二面よ去き日も寝ふあがる暮のせんぐく署とえ
 どのよあつまれあふとも枕よ嫁がもてるの枕めてぐん
 う舞のよやあつらぬとせよ針ぬぬぬこのあけしやい
 よ有強いつおほしろうかうか業ありあハツびぐりのあ
 うけお供来たべことほきだんの内入ア嫁女んびき
 はたくとあふは枕をとりよせあつらとせつやあさる

びき嫁く一日のあつらふ業このこと今よ又ひる
 ちや後くこの年やとやとおひきれを被さる
 らいとねくこ一たれど海がうんめさく

まへくは目

屋毛をゆへぬあせあせも友達のようとして細く
 うあせよ入下靴よこひけから世にあげ下靴チト
 るもあよいよとあせも今まの友達の方持てぬぬ
 る人よ足半よ及いぬ人あまはあせあせあせあせ
 こつてくあせあせあせあせあせあせあせあせあせ

日十八文百文粉ぶらりもびざりまふ。侍イヤ田分
 又てうけたまうれどおる。前よこの敵うちとな
 天晴く〜おらさうま人の武士と申たまふ。敵の
 中よこののびたぢんこち。身を捨てて奴らとて感
 心した。こゝ敵のよき家なればしこら。奴イヤれ
 りと申さるものぞいざらませぬ。ぬうの〜ゆり賞
 け用ある。梅も侍まふ。侍二人イヤモお強よまお
 人ふらぬぐ。其のお人とおも。星が。おまぶ。うねよ
 戸か〜侍よこはし。おらさうま。あつた。うら〜

かくたの本をゆえあ。まねと。いささ〜。奴は
 く〜。あ〜。よぬ。まふ。さう。あさ。持の。中。こ
 びざり。ゆせぬ。其の。まら。うら。で。お。な。ら。ま。ふ。二。人。の。侍
 志うと。かく。ま。う。ら。ち。で。あ。い。あ。ぬ。た。ら。う。を。あ。ん。の。か。し
 ます。う。ぞ。二。人。の。侍。愛。お。不。忠。う。の。あ。び。

去り娘の

侍。ま。目。出。と。ふ。あ。ま。ふ。ま。ふ。あ。の。ら。う。茶。即。ま。と。縁
 も。あ。く。梳。を。う。め。て。ツ。イ。ご。う。く。ヤ。ア。是。い。ち
 び。ぬ。あ。ま。ふ。ヤ。ま。び。ご。う。ま。の。お。び。ご。う。〜。あ。〜。ら

いざめりくくヤアむうへ飛ひるる板もイヤ
夏いたさけドヤ ホウ茶ふるちかしの是つねを
さばしうおまを板又後何れを女いよまよはる
ホ、ウとおのしを下あぢくおまをさせヤ
くといふよ、ウここのびさく板の今の夏うま
まうへ家士の夏と目出さとせどうあつた、コリヤ
アんな今起しといわどや、ハイおあつての夏板が
まはしこ、ナニおどろめるどやく、控てはま、ハイ、
あまこのお池の夏板てあつちん、こ、そんなうら

待柔山

振舞房りのあつ癖さぐん若ものを森すれよ若
あふを下女着女の若あたまふまを足ねあつと
板あつとじいよまといひあはつと抱付小あつとあ
アや若よ後またりの森あつ細よかあつとあ
下女あつてもあつとやねあつとあつとあつとあ
いぢやといよあつとあつと抱つたあつと、下女あつとあ
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ
下女も我森あ入足ねあつとあつとあつとあつとあ

奥あつらう〜せう〜あけふぬよあり。どねの縁るめ
 ゆり起して〜し〜あねとぬさの海うさ〜やいせ
 ぶざりまふ

あての〜

教儀を解法さこのよまじと重尻の海人ものけおとよお
 うあして撥さうぬたアのちよゆきたきとも茶室のう〜
 つひ袴竹光の朱緒の天おちり正しくさきおのまん
 中よ解し飛るお隣の名まお茶のひよ来ては袴を見
 よう依おをさぬ今おの何るでぶざりまふ芝居でさう閑

人 た が ら



所の役人なるやうな者候と云くは有御座り候はし
と云くを易たてのめいといふは浪人イヤサ合くさやうであら
おとよめつらん表巻屋の事おのりの解つても目出さうであら
かう招待はするてまをとおてと皆をばさる彼もあつた
又幾のソリヤおまゝお金なりおしどいお一表巻屋と裏
かやと御合が遠くそれをも格別の新入あらうと云て
いあしやうもあつたもきれなせぬよあ金なりをさ
まのよめであがりまふそれとくよぶもあつたや
おのよめいおつたおまゝ

原焼玉子

ヨウく 沢村さぬ其言まゝくくハ高き傳
万人のそま申ふおひといふ男の只ひとりといふ向掛敷の
おのよめいおつたおまゝ

夜の綿一本

おのよめいおつたおまゝ
かゝるはばはたとたりんを夜を寝る首がけぬ思を
おのよめいおつたおまゝ
おのよめいおつたおまゝ

夜の綿

夜の綿

夜の綿

き。イヤと云ふとじがあらふを悪ひ。せし。指しあつたをき。
 才一徳が有つ本指をを後えつとあつて。後一徳をえ
 らぬ。フ、フ、フと云ふは。後一徳が。又此の。孝はる
 愛り。又身をを。買ひて。と云ふ。まゝて。出ぬ。行なく。十三
 神傳の。後一徳。ゆり。まも。一文も。下白。件。の。男。本
 下。白。あつ。と。後。ゆ。と。下。や。後。後。一。笑。つ。人。ま
 宗。と。フ。レ。と。り。あ。り。ド。レ。と。後。指。ホ。、。ウ。見。ぬ。傍。行
 て。実。あ。つ。と。二。支。で。買。つ。て。フ、レ。指。子。ヤ。二。支。ツ。中。で。入
 ち。よ。へ。あ。つ。と。ぬ

耳のふれ遠

友連三人。あ合。ゆ。り。し。を。人。を。い。ひ。か。る。は。も。私。あ。つ。と。夏
 下の。耳。が。む。ま。ば。は。あ。の。て。角。か。れ。と。た。ぬ。と。い。ふ。と。り。し
 男。角。か。り。と。い。ふ。あ。つ。と。何。ぞ。能。く。も。ま。う。と。い。ふ。を。ア。能
 る。と。い。ふ。と。り。ば。あ。つ。と。も。聞。ぬ。と。い。ふ。と。り。し。人。が。ま。る。り。相。い
 芝。居。へ。い。も。た。で。は。あ。つ。と。と。聞。せ。ば。あ。つ。り。が。あ。つ。と。い。ふ。と。り。し
 こと。が。平。ら。で。耳。を。ひ。つ。や。し。と。月。才。で。あ。つ。と。耳
 を。た。と。と。あ。つ。と。友。連。の。あ。つ。と。い。ふ。と。り。し。と。い。ふ。と。り。し。と。い。ふ
 くれ。を。友。連。耳。を。た。て。イヤ。モ。と。い。ふ。と。り。し。と。い。ふ。と。り。し。と。い。ふ。と。り。し。

とみだまらりたどまの着物を着久由道城坊へり
芝飛之遠入んせしお本戸を肩はきまて、コリヤと云ふや
をく又へ彼男耳をおくら、本戸舞うと物いへた
をあらしく指文トヤ

風持雲

ねもちあまのいづれぬもよや、まの足船まの悟れぬ
ひも塚もあなを教ふせ付かよおれど芝飛一ツカせまふ
まよあど花見を山まきくぬのう、出入の身まよあ
よこの丁見やが我よまあ、あふ海の中まかんを

一向舟へとて出さぬ也、里の秋連も余ふびんよあひか
寺系、あまにが娘を連てまうとふざりと、後ひよあれ
男のいづれまあ、あふひどろをうぐ、あせとねま
の桃うーの橋えあくと、二秋よまをれせうく、あれ
よ肉へゆり、ねあひの娘をよまきいられ、あまを
とじほしと、秋の橋板の流よ有、ねも久ーがりて能
あつけ、あまのいづれぬもよや、まの足船まの悟れぬ
あつけ、あまのいづれぬもよや、まの足船まの悟れぬ
あつけ、あまのいづれぬもよや、まの足船まの悟れぬ

長衣を色におく也。中し。世に人々は。佛の心。ありんを。ふ
りきん。一。おと。おされ。を。中。く。と。百。云。経。の。を
て。と。ね。ま。も。諸。衆。生。の。様。又。く。と。お。ま。え

五月の彼岸子

長衣をきん肉より。長衣をきん肉より。ア。イ。向。こ。ト。や
ア。ノ。ナ。十二。三。方。比。く。門。口。で。考。が。つ。を。あ。ま。の。ひ。あ。ん。は。て
ま。へ。あ。ま。の。死。で。よ。人。の。居。て。ま。る。極。よ。ト。や。ま。て。が。て。ん。ん。つ。と
あ。ん。は。て。こ。あ。ら。の。身。子。の。が。出。ふ。と。と。ね。ま。ん。内。て。あ。ま
を。め。や。く。く。や

人 室

有。徳。人。お。た。中。を。好。は。し。よ。い。ら。お。善。と。も。報。よ。お。込
ら。の。と。も。あ。う。と。も。あ。う。ぬ。我。死。と。あ。り。下。何。を。ぞ。よ。と。え。に
る。あ。れ。を。よ。う。く。報。の。指。お。を。して。そ。の。日。を。送。り。が。門
の。内。を。去。歴。く。の。身。子。あ。り。く。通。の。あ。ら。日。誓。た。は。は
ま。ん。毎。百。を。あ。う。よ。沖。の。あ。く。ま。ん。を。送。り。ま。も。危。く
報。が。と。り。ま。せ。ぬ。又。四。作。逆。を。格。別。お。前。の。中。う。を。あ。る。色。の
出。ま。せ。ぬ。作。逆。ア。お。ま。ご。が。あ。る。が。出。せ。お。仕。合

新撰嘯齋集巻四の終



